

MAX STUDY GROUP

Vol. 2 2015年11月7日

第2回 レポート

A テーマ設定

アクティブラーニング、第2回セミナーです。今回はより実践という観点からワークショップを行いました。

B プログラム

1 アイスブレイキング&エンカウンター: Three Adjectives to describe yourself

自分を表す3つの形容詞をテーマにアクティビティを行いました。

3つの形容詞というのは、アメリカで英語の履歴書(レジュメ)を書くときによく行う自己PR手法です。英語で例を出すと Responsible(責任感が強い)、Sociable(社交的)、Open-Minded(オープンマインド)といったような語です。海外進学などに向けて私が英語の推薦書を書く際にも、生徒に3つの形容詞を考えさせ、それに基づいた自己分析をさせたり、関連したエピソードの聞き取りをしています。国内外問わずAOや自己推薦のエッセイなどでも使えるアプローチです。ちなみに、私の英語の推薦文には、生徒の出した形容詞と私がその生徒に対して感じる形容詞を組み合わせ、「I believe that she is a **diligent, self-disciplined, and motivated** individual who will...」というような文が載ります。

今回のアクティビティは3人1グループで行いました。手順としては、①自分を表す3つの形容詞を発表する(自己評価)、②ほかの2人がその人を表す3つの形容詞を言う(他人からの評価)というものです。しかし、形容詞だけを言うのではなく、その根拠となるエピソードを合わせて伝えなくてはなりません。「生徒と接するとき、、、」「この前、～という姿を見て、こう思った」などです。よく知らない相手に対しても「～してそう」「～っぽい感じがする」といった印象を伝えます。

自分をPRするのは恥ずかしいことで、最初はみんなはにかみながら、言っていました。他人から「こういうところあるよね」と褒められると、やはりうれしいものです。普段褒められることが少ないのか、顔を赤らめながらも、ニヤニヤしながら話をしていました。「もっとほめて、ほめて～」という女子の声も出て、このアクティビティーが予定時間よりも大幅にかかってしまいました。まあ、気持ちよく帰れるならいいか、と思って、流れに身を任せて20分以上費やしました。

その後、せっかく盛り上がったので、この続きとしてどのようなアクティビティができるか」話し合ってみました。以下のようなアイデアが出ました(私の案も含んでますが)。

- ・自分と同じ形容詞で褒めてもらった仲間を探し、グルーピングをする。
- ・小学生相手ならビンゴのマスに形容詞を書いて、その語をクラスメートに行ってもらうゲームにする。
- ・相手に言われて一番意外だった形容詞を選び、その理由を述べる。自己評価と相手からの評価のギャップを分析する。

2 アクティブラーニング 実践例の発表

渡邊奈緒子先生から、アクティブラーニングの実践例を紹介していただきました。本来は英語の授業で実践されるものですが、それをベースに今回は日本語でグループワークを行っていただきました。具体的な手順などは、事情により割愛いたしますが、グループ内で分担を作り、ヒントを出し合いながら、4 択の心理テストの答えをまとめていく、というものです。私も参加しましたが、色々な工夫がしてあり、シンプルでありながら、日本語の活動にもかかわらず、最初の印象以上に楽しさを感じました。



渡邊先生から、どのように生徒に指示を与えるのか、どのように発表活動につなげるのか、という2つの問題提起がなされました。参加者からは、「指導の留意点は何か」「アクティビティの組み立てのポイントはどこか」「どう評価するのか」など質問が出されました。

次に、思考力という観点から、このアクティビティを分析するディスカッションを行いました。まとめると以下の2つです。

Q1: インテル社の「ブルーム分類学」という資料をもとにして、どの思考スキルがアクティビティに組み込まれていたか、特定してください。

これについては、6つのレベルのうち、レベル1の知識、2の理解あたりは多く含まれていましたが、それより上はほとんど入っていない、という意見が多くみられました。

Q2: 前回提起した「アクティブラーニングの2次元モデル」に基づいて、X軸(活動形態)、Y軸(思考のレベル)のとして、アクティビティの座標を決定してください。

(学習形態として活動的であればX軸の座標が大きくなり、求める思考レベルが高ければ、Y軸の座標が高くなる、ということです。)

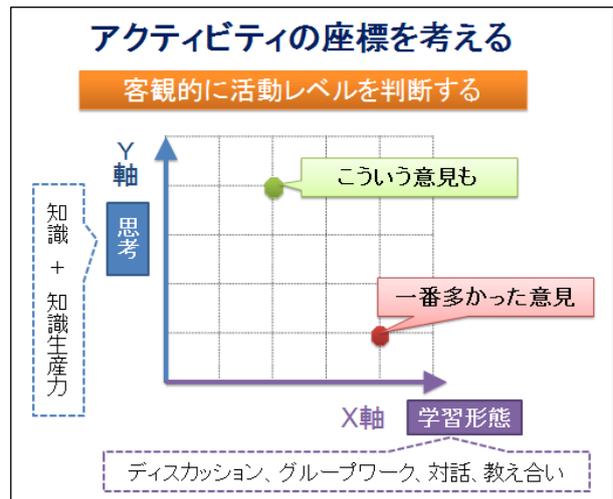
5段階評価で、一番多かったのは、発表者の渡邊先生を含めてX=4、Y=1ぐらいの座標です。つまり、活動的だけれども、思考はさほど必要としない、ということです。しかし、1人、X=2、Y=4というほぼ逆の見解を持った先生がいました。彼女いわく、発表する活動までつなげるのであれば、思考レベルはもっと高く位置づけてよいのでは、ということです。

また、X=4、Y=1という座標だとして、どう工夫すれば、Y座標が上がるのだろうか、という問いが出されました。これについては、時間の関係で各自持ち帰って考えることにしました。

ここで1つ問いを出しました。

これらの2つのディスカッションクエッションを提示した意図は何だと思えますか。

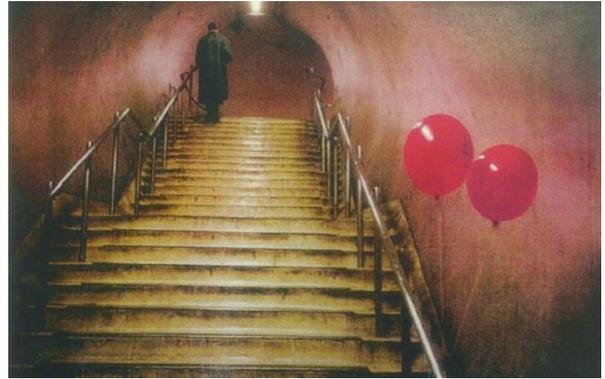
「なぜ私がQ1、Q2の2つを提示したのか」ということです。これはすぐに参加者から答えが出されました。「メタ認知」、つまり「自分たちの思考を客観的に把握し、分析する」という目的です。私たちがアクティブラーニングに取り組むときに、やみくもに見ていくのではなく、思考力という観点からも評価、分析できなくてはなりません。その際に、思考力と言っても、どのぐらいの思考レベルなのか、どの思考スキルなのか、まず我々教員が把握、認識していることが大切です。特に座標を考えるQ2の問いは、メタ認知という点において、議論しやすく、可視化しやすいアプローチだと思いました。



3 アクティブラーニング ワークショップ

前回のレポートで予告した通り、私が全国私学アクティブラーニング研究会の模擬授業で使った右の絵を使用して、みなさんにもアクティブラーニングのレッスンプランを考えてもらいました。

この絵は、2015 年度入試である医学部で出された絵です。「この絵を見て感じたことを 800 字でまとめなさい」といった趣旨でした。



これを用いてアクティブラーニングのレッスンプランを作るわけですが、いくつか条件を出しました。

- ① 対象学年は中 3。
- ② 普段のカリキュラム・授業の一環として取り入れ、あくまでも自分の担当教科としてレッスンを成立させる。
- ③ すでに前時限で、絵の分析(事実の抜き出し、分類など)は行っている。本レッスンはその後続く教科として発展的な授業と位置付ける。
・つまり、この絵は初見ではなく、生徒たちは一定程度の観察を行っている。
- ④ 最低 50 分のレッスンプランを作る。2 時間以上かかるレッスンプランでも良い。
- ⑤ ブルームの表(インテル)から、どの思考スキルをターゲットにするのか、先に決定し、それをもとに授業を組み立てる。

同教科のグループを作って、20 分程度考えてもらいました。以下に、概略だけ紹介します。今回は、記録の関係上、全 5 グループの中から 3 つをご紹介します。(残りのグループと空欄の部分は、次回の勉強会で書いてもらい、再アップしたいと思います)

グループ1

教科： 社会科

設定： 日本国憲法と社会権

主なターゲットスキル： 分析、統合、評価、想像、創造

レッスンプラン

- (1) 日本国憲法の社会権を読ませる。
- (2) ディスカッション： この写真が「便利か、不便か」
どんなところにバリアを感じるのか、誰にとってのバリアなのか



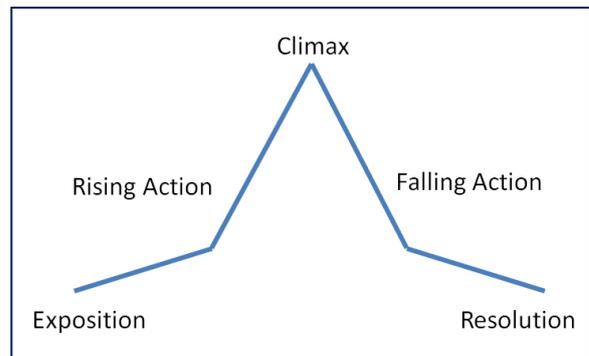
- (3) ディスカッション： 私たちが住む社会、世の中にはどのようなバリアがあるのか
- (4) グループワーク： 本当の意味でみんなの社会権が守られる社会とは、どのような社会なのか、提案をする。

グループ2

教科： 英語

レッスンプラン

- (1) ランゲージアーツで学ぶ物語の流れ(右図)に沿って、簡単な物語を英語で読む。
- (2) 絵を5つの場面のどこかに入れて、自分たちでストーリーを考える。
- (3) そのほかの場面の絵を作り、紙芝居を行う。
- (4) 紙芝居を発表する。一人当たり、5行程度の英語。



グループ3

教科： 体育

設定： 創作ダンス

レッスンプラン

- (1) 絵に対して、各自が持った印象を言葉に書いていく。
- (2) そのイメージを自分たちの方法で分類をしていく。
- (3) 自分が共感できるカテゴリーを1つ決め、それを選んだ者同士でグループを作る。
- (4) 共感したことに基づいて、テーマを決め、ストーリーを作り、それを表現するダンスを創作する。

C 次回に向けて

今回は上記のグループワークのレッスンプラン作りに時間を割いたため、そのディスカッションがあまりできませんでした。よって、次回はこれらのレッスンプランについての批評と問題点の提起、改善策の提案をしてもらう予定です。場合によっては、違うグループの改善案を考える、といったことも試みたいと思います。また、当初予定していた私の模擬授業でのレッスンの共有、解説ができませんでしたので、そちらも行います。その後、後半は、課題解決型授業の導入に入れればと考えています。

なお、次回からはアイスブレイキングは参加者が持ち回りで考えてくることになりました。担当の方、よろしく願いいたします。

D REVIEW & REFLECTION

第2回の Review & Reflection は、実践発表をしてくれた渡邊菜緒子先生に執筆してもらいました。

渡邊先生

今回のアクティブラーニング実践発表は、ジグソー法を使い、グループで協同し、お互いのインフォメーションギャップを埋めるというものです。様々な教科の先生が参加しているので、英語ではなく、4択の心理テストで行ってみました。今回は授業形態(X 軸)の紹介に重きを置き、思考レベル(Y 軸)のことに必ずしも焦点を置いていません。

では、普段の授業では常に思考レベルを意識できているのかと言われると、そうだとは言いきれません。今回の実践発表をする中で、私自身も「英語が母国語ではないということのハードルに甘んじてはいないか」、「生徒の思考自体を深められているかどうか」ということも課題として改めて考えるきっかけになりました。

例えば、私は高校で英文法の授業を持っていますが、全体で答え合わせをする前にペアで答えを確認しあう時間を設けています。相手と答えが違った場合、なぜその答えにしたのか、根拠を相手に説明します。どちらの答えが正解か、この問題の答えは何か…、知的好奇心が高まったところで、クラス全体で答え合わせを行うという流れです。今後の課題は「知識を問う問題から、どのように思考レベルを掘り下げていくか」ということです(そもそも文法の授業でアクティブラーニングは可能なのでしょうか、という疑問もあります)。

今回の AL ワークショップでは、湯水の様に授業案が出てくればいいのですが、何とか1つの案を形にしたのみで終わってしまいました。しかし、他教科の視点は新鮮で、ぐっと視野が広がりました。また、発想は良くとも、実践と言う立場から考えるとそれぞれのレッスンプランに色々な問題点も見つかри、次回に持ち越して考えていこうと思います。今回は、関先生の授業を提示していただけるということで楽しみにしています。

アクティブラーニングというのは奥深いです。答えはないのですが、こうして土曜日の夜に学校の枠を超えて前向きに討論する同志をこれからも大切にしていきたいと思います。生徒のために、より充実した授業を目指して、また次回もいっぱい考えていきたいと思います！